主役は野球部だけじゃない！
東海高校が一丸となった夏の２日間

高校球児の夏がやってきた――。７月８日に開幕した第105回「全国高等学校野球選手権記念茨城大会」。昨年に引き続き「単独チーム」として出場した県立東海高等学校の野球部を、東海村スマホクリエイターズＬａｂ.が取材しました。

【問い合わせ】地域戦略課プロジェクト推進担当（☎282-1711 内線1331・1339）

4年ぶりの声出し全校応援

７月10日、東海高校の１回戦の相手は、那珂高校・高萩清松高校連合チームでした。

新型コロナウイルスの感染拡大により、令和２年以降、さまざまな制限下で実施してきた高校野球の大会。今年は感染症対策が緩和され、応援団、吹奏楽、そして生徒による声出し応援が、再びできるようになりました。

当日は、熱中症警戒アラートが発令されるほどの猛暑の中、東海高校の全校応援が実施され、生徒や関係者約５００人による声援が野球部の活躍を支えました。

みんなでつかんだ「夏の１勝」

３回表、フォアボールで広がったチャンスに、ヒット２本を集めて見事な３点先制を決めた東海高校。終盤はピンチの連続でしたが、ダイビングキャッチやフェンスに体当たりしながらもボールを落とさない気迫のファインプレーなど、鉄壁の守備で１点差を守り切り、３対２で念願の夏の１勝をつかみ取りました。

１試合目を振り返って…

試合後、唯一の３年生で主将の榎本匠里さん（下写真）は「次の試合も自分たちの野球を貫いて９回まで楽しみたいです！」と語り、時折うれし涙を浮かべながら、勝利の喜びをかみしめていました。また、正木昇さん（東海高校校長）は「きっとみんなの頑張りを見た野球の神様がほほ笑んでくれたんですね。これまではコロナの影響で制限が多かった。高校生は一つのきっかけで大きく成長します。この夏の挑戦が東海高校生の大きな成長につながって欲しいと思っています」と、生徒たちへの思いを静かに語ってくれました。

届かなかった「夏の２勝目」

７月13日、２回戦の相手は水城高校でした。１回戦で好調だった守備が、エラーをきっかけに崩れてしまい、リズムをつかみきれなかったこの日。相手の攻撃を止めることができず、失点を重ねてしまいました。それでも最後まで諦めることなく、白球を追い続けましたが、１点が遠い展開となり、残念ながら５回コールドで敗れてしまいました。

スタンドでは、この日も全校応援を

Pick up!

全校生徒の思いを乗せて…

最後までエールを送り続けた仲間たち

チアリーダー

この日のために、自分たちで振り付けを考え、練習を続けてきたそうです。ジャズバンド部の演奏に合わせて踊る姿が、スタンドを華やかに彩りました。

ジャズバンド部

普段とは全く違う演奏に当初は苦戦しながらも、練習を積み重ねてきた部員たち。試合終了まで迫力ある音色をスタンド中に響き渡らせていました。

応援団

“自分の特徴である大きな声を生かして野球部を勝たせたい”という思いから、応援団長に立候補した大谷美月さん(1年)。強い日差しが照りつける中、最後まで、ひときわ大きな声で声援を送り続けました。

実施。球場の雰囲気や声出しにも慣れてきた生徒たちは、最後まで〝選手に届け〟という思いを胸に、大きな声援を送り続けていました。その声は、きっとグラウンドの選手たちに届いていたことでしょう。

2試合目を振り返って…

試合後、この試合で引退となる榎本さんは、「手も足もでなかった。悔しい。でも、目標としていた夏の1勝をつかみ取ることができて良かったと思います。1人でチームをまとめるプレッシャーもありましたが、監督や先生、後輩たち、そして家族の支えがあったおかげで、ここまでくることができました。とても感謝しています」と語りました。

取材を終えて

高校野球と言えば球児たちの熱いプレーが魅力ですが、それだけではありません。実際にスタンドに入ると、応援団、チアリーダー、ジャズバンド部など、東海高校生一人ひとりがそれぞれの立場から、今、自分にできる精いっぱいの力を出し切り、みんなとの時間を共有することを心から楽しんでいた2日間だったように思います。この夏の経験と悔しさを胸に、先輩からのバトンをしっかりと受け取り、来年こそは、念願の夏の2勝とその先を目指して、東海高校一丸となって野球場に帰ってきてくれることを期待しています。

「スマホクリエイターズLab.」は、村と住民が一緒になって地域を面白くする取り組み「東海村つながるプロジェクト(T-project)」から生まれた企画です。プロの講師から撮影技術や記事の書き方、SNS等を活用した情報発信スキルを学んだ住民ライターが、まちづくりに参加し、村の魅力を発信しています。

▲スマホクリエイターズ Lab.

▲東海村つながるプロジェクト